岩黒島散策マップ

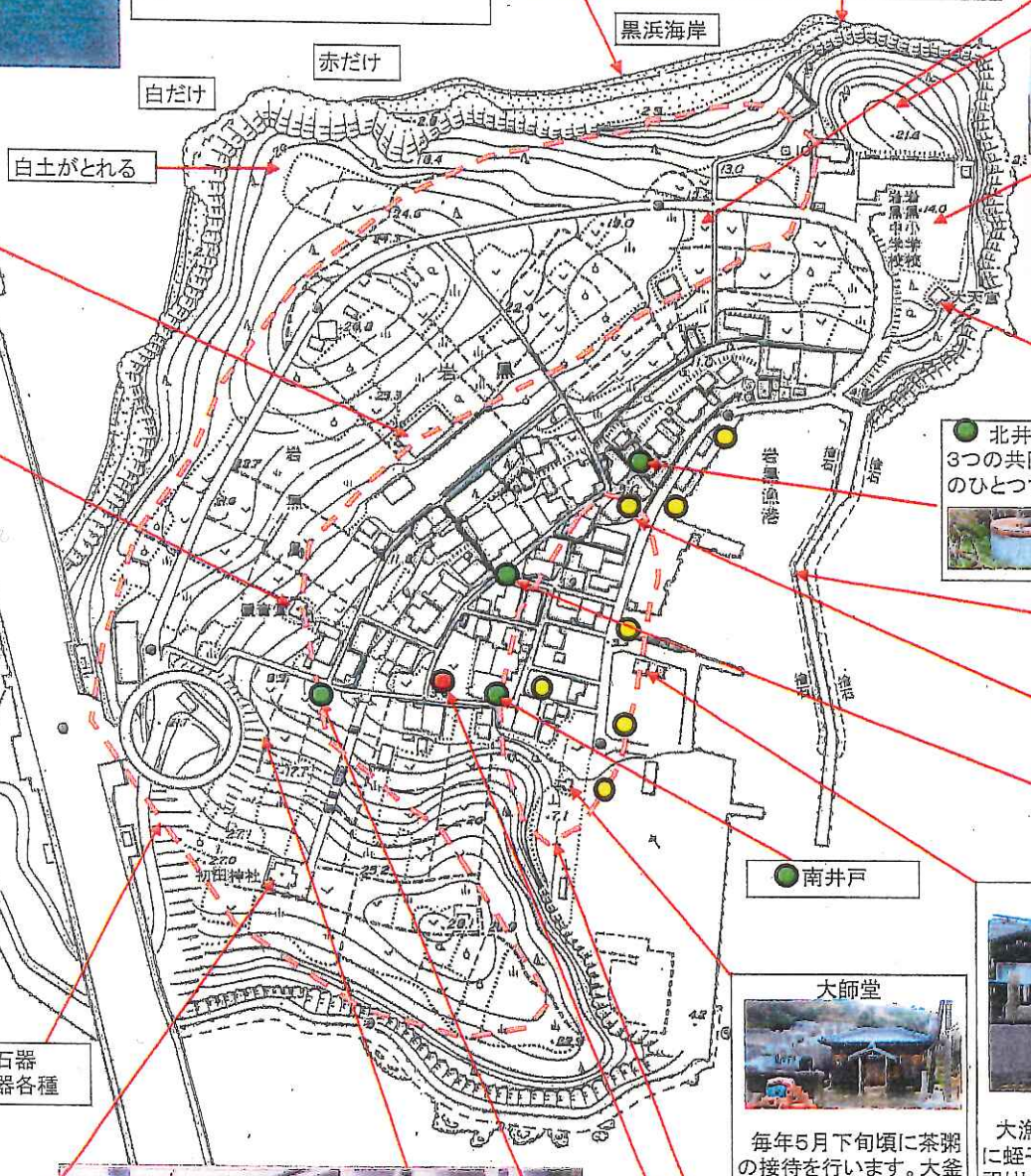
瀬戸大橋工事前の岩黒島

粘土の採取
島の北東には「白だけ」「赤だけ」「黒浜」から良質の粘土がとれ瓦焼きに使用していました。粘土がとれたのは瀬戸大橋が架かる島では岩黒島だけです。焼き物の色は粘土の色ではなく同じ粘土でも焼く時に酸素を供給すれば赤系になるが酸欠状態では黒くなります。

島名の由来ともなっている
黒い角閃石片麻岩

愛宕神社
祭神は「伊邪那美尊」「火産霊尊」で京都の愛宕神社から勧請されたものです。火伏の神様として島の安全を守ってくださってます。4月10日が祭日でこの日は島で獲れたワカメの酢の物をお供えしお詣りに訪れた人は社の前でお供えや御神酒をいただき一年の無事を感謝します。

旧・岩黒小中学校



岩黒小中学校

大天狗神社
岩黒島では「大天さん」と呼び祭神は「猿田彦神」と「大物主神(一説には木霊神)」です。漁の安全を祭っている神社ですが、物を失くしたり家出人がでたりしたときにはお祈りしたり狛犬の足にヒモをむすんだりすると見つかるそうです。毎年6月12日の祭礼には島の馬鈴薯とソラマメをお供えします。

ご神体の天狗の焼き物は、明治33年に中村市三郎、直二郎親子が造ったものです。

古い大天狗
島の粘土で焼かれた祠には安政3丙辰ノ年(1856)が見れます。

狛犬
素焼きの狛犬の足元には、捜し物の願い事をした人が結んだ紐が幾筋かあります。実際に御利益に授かった人が幾人もおり不思議な体験をされてます。

観音堂

島開発当初、開墾中に出てきた十一面観音座像(鎌倉中期作)をお祀りしています。この仏像は県下でも珍しく懸け仏で坂出市の文化財に指定されてます。お堂は観音さまが発見されたところに建ってます。島の人の信仰も厚くケガや病気のときはみんなで回復をお祈りします。観音さんの右肩には掘り出したときの鍬でついた傷が残ってます。毎年、旧暦3月17日のお祭りには、秘仏のご本尊が開帳され島外からのお詣りやお接待で賑わいます。

堂内部

高宮小右衛門の墓
観音堂には岩黒を開拓した時の人名の年寄り高宮小右衛門の墓があります。

旧石器
旧石器各種

北井戸
3つの共同井戸のひとつです。

竜神
海の神様で漁での海難を助けてくれます。

瓦窯
江戸時代から大正時代まで盛んだった瓦焼きの窯は7つほどありましたが今は造成などで全てなくなりました。神社に残る狛犬は琉球の焼き物に似ているそうです。

南井戸

中井戸
3つの古い共同井戸のひとつです。井戸水を取り入れるため周囲から塩ビパイプが入っています。

井戸には取水の塩ビパイプが集まってます。

恵比寿神社

大漁と海の安全の神様で右に蛭子様、左に金比羅様をお祀りしています。祭日は1月10日でこの日は大根の酢の物を作ってお供えし島中で大漁を祈願します。

大師堂

毎年5月下旬頃に茶粥の接待を行います。大釜で炊く茶粥には島外からも大勢の人が訪れます。

南井戸
3つの古い共同井戸のひとつです。隣には地神さんが祀られています。井戸は、使用はしてませんが道路整備で半分ふさがれた状態です。

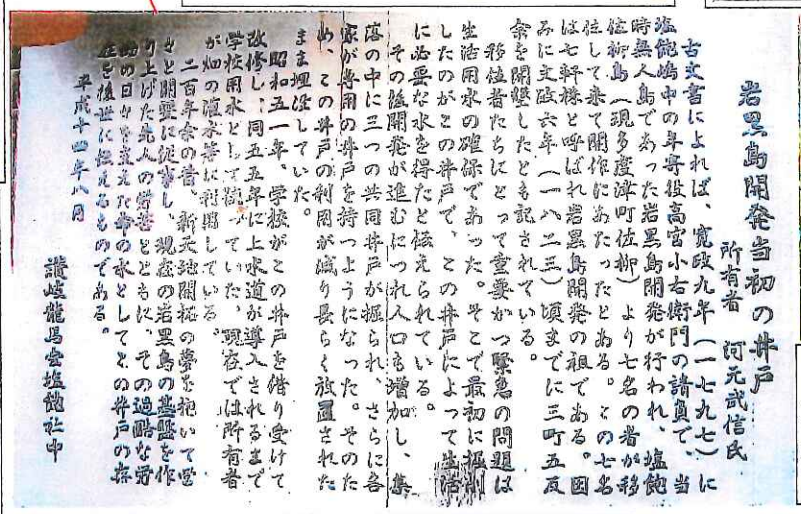
開口部が半分の南井戸

井戸の神様とネコ

隣の地神さん

旧石器～鎌倉時代の遺物
浜辺で各時代の遺物が採取された。この浜の奥の山すそ近くに瓦窯があったといわれています。寛政9年(1797)以前のことについては明確にはわかっていません。

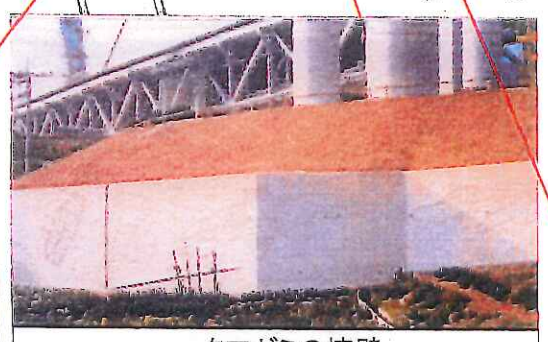
ムラ井戸の伝説
岩黒島開拓時以前には島の南側に井戸があり船乗りがそこで水を飲んでいた伝説があります。断定はできませんが畑の中にかつて泉が湧いていただろうと思われる場所があります。


岩黒島開発当初の井戸
所有者　河元武信氏
古文書によれば、寛政九年(一七九七)に当時無人島であった岩黒島開発が行われ、塩飽諸島(一現多度津町佐柳)より七名の者が移住して来て開作にあたったとある。その七名は七軒株と呼ばれ岩黒島開発の祖である。図みに文政六年(一八二三)頃までに三町五反余を開墾したとも記されている。
移住者たちにとって重要かつ緊急の問題は生活用水の確保であった。そこで最初に掘削したのがこの井戸で、この井戸によって生活に必要な水を得たと伝えられている。
その後開発が進むにつれ人口も増加し、集落の中に三つの共同井戸が掘られ、さらに各家が専用の井戸を持つようになった。そのため、この井戸の利用が減り長らく放置されたまま埋没していた。
昭和五一年、学校がこの井戸を借り受けて改修し、同五五年に上水道が導入されるまで学校用水として活用していた。現在では所有者が畑の灌水等に利用している。
二百年余の昔、新天地開拓の夢を抱いて渡り上げた先人の偉業とともに、その過酷な労苦の日々を支えた井戸の水としてこの井戸の存在を後世に伝えるものである。
平成十四年八月
讃岐龍馬会塩飽社中

最初に造った古井戸
岩黒島開拓時に最初に造った井戸です。その後開発が進むにつれ人口も増えたことから北井戸、中井戸、南井戸の3つの共同井戸が掘られました。

初田神社

岩黒島の産土神社で祭神は「埴安神」ですが、昔無人島であった岩黒島の開発を勧めた初田助十郎(大阪町奉行所与力)のご恩を感謝してお祀りしています。瀬戸大橋の工事で現在の場所に移転しました。参道には桜が植えられ春には桜のトンネルができます。下から見上げると神社の奥に岩黒島橋2P主塔が鳥居のように見え3段鳥居になってます。10月第二日曜が秋祭りです。大人の御輿とともに小中学生全員が獅子舞や「浦安の舞」を奉納してお祭りを盛り上げます。



クマゼミの擁壁
昭和45年全校生徒わずか10人の岩黒島中学校の生徒が3年がかりで取り組んだ「クマゼミの研究」が日本学生科学賞の中学生部門で1位に輝いた。
当時クマゼミの生活史や生態の研究は遅れており調査研究の中で新たな発見もあった。瀬戸大橋の工事ではコンクリート擁壁に子供たちの偉業を伝えるためにクマゼミの姿を彫り込みました。

「クマゼミの島」
著者:島本寿次

碁石茶
でつくる茶粥
岩黒島を開発した祖先の佐柳では碁石茶で茶粥にする習慣があります。江戸時代に土佐藩が参勤交代の時に詫間港を使用していたことから高知の大豊で作られている碁石茶が佐柳島に伝わり、そして岩黒島に伝わったものです。碁石茶で茶粥を食べる習慣の起こりは田んぼが無くて米のとれない塩飽の島々で魚を売って手に入れた貴重な米を食い延ばすためです。塩分を含む井戸水には碁石茶の茶粥がむいていたそうです。碁石茶の呼び名は「碁石茶」「カタマリ茶」「玉茶」「サヌキノウマノクソ」があります。瀬戸大橋ができるまで高知の大豊で作られていることは知らなかったそうです。

岩黒島の港

7軒株(岩黒島の先祖)
寛政9年(1797)に現在の岩黒島を最初に開拓した佐柳島の7人を先祖にもつ本家のことを7軒株と言います。株の意味は、島の開発で入ったときに塩飽の3人名株を7人で共有したためと推察されます。
7人の名前は、カエモン(岩本)、キンヒョ(元川)、ブンロク(島本)、マタゴ(岩中)、ゼンサ(河元)、シチジ(宮崎)、アサエ(中村)です。
島に開拓で入るときに人名の年寄り高宮小右衛門より各自に家の支度金200匁と糞壺1つのほか7人全体で荒麦7俵、鍬代5貫文が支給されました。

作成: H23. 3. 11
文責: 瀧下 健二